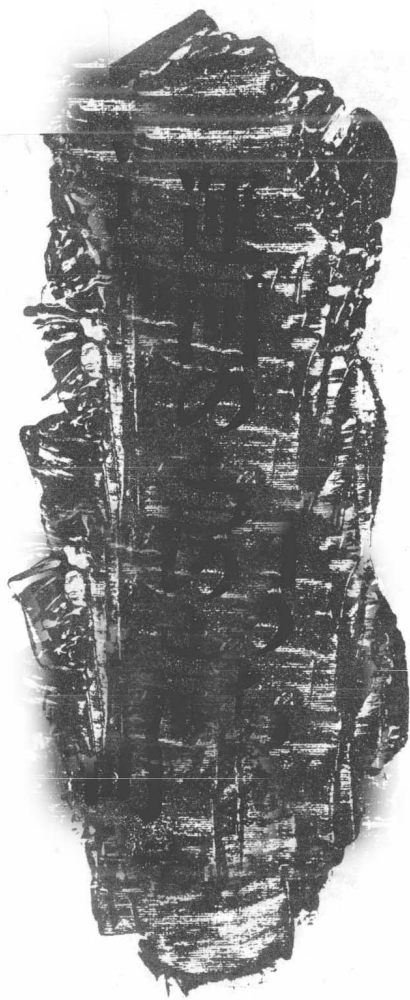


運河のある町

森万紀子





森万紀子

運河うんがのある町まち

一九八五年五月二〇日 第一刷発行

著者——森万紀子もりまきこ

© Mori Makiko 1985, Printed in Japan



発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二(大代表)

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

目次

道づれ 5

運河のある町 47

私の華燭 81

虚鳥が孵る 121

死んだ男 189

運河のある町

装
幀・三富誠一

道
づ
れ

「——あなた、泣くのならあっちへ行つて泣きなさいよ」

老女は新聞を読んでいた季世に近寄つて来ると云つた。

「あっちよ。車が途切れた時、さつと渡れば行けるわよ」

老女が指差す方を季世は見た。

車の流れを左右に分けるコンクリートに囲われた頑丈な一画は、かなり広く敷詰めた芝生で明るい。

「ほら今なら渡れる」

だが季世は老女から離れ、なだらかな坂の傾斜を登るとまた新聞を開いた。

都心の駅の側、KデパートとOデパートのビルとビルの間の舗道は、三角形の淡い色とりどりのタイルが敷詰められ、両側に聳え立つビルの壁が迫っている。

その細い空間は道路でも回路でもない。

それは、都心に乱立する立体から立体の谷底を走る峡谷に思われてならない。

屋は僅かな陽光、夜は月光を浴びながら、正三角形の模様は整然と足元に浮び上がる。

しかしこの峡谷を知る人は少ないらしく、人波の怒濤はその入口を通過したまま真直ぐ駅の構内に向い、時々風と一緒に波飛沫が飛び散るように、何人かが紛れ込んで来るだけである。

今朝は四人、五人と一方のビルに凭れながら流れて行く朝の時間の中に佇んでいた。

通勤途上の書類袋を抱えた青年、待ち合わせ風の若い女、ノートをむき出しに持った学生、そしてあの老女。

皆、ビルの壁に背を向けたまま、もう一方のビルのくり抜かれた大きな硝子窓から見える、中の陳列棚を眺めている。

靴もハンドバッグもマネキン人形もみな後向きの姿だった。

季世はさっきの老女が再び自分に声を掛けて来そうになったので読みかけの新聞を畳むとバッグに入れ、峡谷から駅前の雑踏へ向い歩き出した。

新聞紙で脹らんだバッグは口金が締らないため手で押えながら歩く。

季世は昨日から見ず知らずの男、照川極（三九歳）に対して涙を流していた。

昨夕の眠りの中にも、朝出かける仕度をしバスに乗った後も悲しみは尾を引き、この男と同年である三十九年間の自分の内部を涙が垂直に落ちるのか、冷めたさが体の中を走った。

そのたびに身を震わせ、季世は相変らず、駅前の雑踏を進んで行く。

両腕で自分の胸をしっかり抱えながら足を運んでいると、照川極の自殺に向った気持ちが想像されてくる。

多分、驚進して来る電車に身を晒す恐怖から布団を冠つてのがれながら生き直す原点へ向う。

9 道づれ

轢死はそうするための不要な歳月を打ち砕く手段ではなかったか。

自分の思い込みかも知れないと季世は思う。

しかし他人が彼の自殺について別の意見を云ったとしても、それすら自分の五感を通して伝わって初めて自分のものになる以上、自分が直接感知する思い込みと大差はないと考え、季世は自分の思い込みを反省しようとは思わない。

さつきから上を向いたまま雑踏を歩いていると、照川極の冠った布団が傘となり頭上を覆っている気がし、季世は顔を高く上に向け歩き続けた。

新聞に出ていた彼の家とすぐ側の死に場所である町を訪ねたい気持は今朝、海に面した高層ビル地区の借室を出て来る時から、その町への乗り換え地である都心のこの駅に着いてからも、まだ萎える事なく続いている。

入居して二年目の借室は時々他の数え切れない程多くの棟と一緒に霧の中に沈み、視界を閉ざれ孤立する。

——非在区——この地区の入口にコールドールで大きく落書きしてあるが、棟から棟へ通じる白い舗道もいつも無人だった。

非在区と云うのは地図に記入されていない場所だからか、それとも時々霧に没して存在が消えてしまうからなのか、又、住民がごく少なく人の生活の気配が感じられない静寂な町を意味するからなのか解らない。

しかし非在区の字は入口だけではなく、広大な高層ビル地区をぐるっと取り囲み印づけられていた。

照川極が冠った布団が頭上に傘のようにかかっている、さっきからの錯覚がまだ止まず、季世は相変らず上を向いたまま、首筋が痛くなり一方の手で揉みながら歩いた。

自分の吐く白い息が前を行く人の肩の所で消えて行く。いつの間にか季世はバスターミナルのすぐ側まで歩いて来ていた。

何台かのバスの向うに、新聞に出ていた照川極の住んでいた町、館町駅行きの行き先を掲げたバスが止まっていた。

駅に戻って私鉄に乗り換えるよりバス停まで歩いた方が遥かに近い。季世は思わず足を早めた。

付着した不要な歳月を打ち砕き、生き直そうとして還る照川極の原点を知るために急いでいるのに、季世の足元からは、自分の誕生の日からの生存線が確かな頑丈さを持って、歩行を促してくる。それは、見知らぬ町を訪れようとする時、いつも季世が襲われる慣れた感覚だった。

—— 図 9・12・19 —— 自分の誕生の日は上下から、また横に並べて左右に辿っても、同等の数字である事が、そんな他愛ない事が季世に喜びを抱かせる。まるで自分は膨大な時間の流れの中で偶然、あらゆる事象が均衡になる位置に生れ合わせた幸運な女に思え、更にその位置のため常に穏やかな存在でいられるとさえ確信する。

日常の騒音は底深く流れ、ざわめきを直接感知する事がない季世の内面は、半分眠ったような鈍い静かさがゆったりとたゆたう。

稀に全身に揺れを感じる時でさえ、自分の存在は、もともと分水嶺や潮目の空間に位置していると思われ、揺れに不安を感じる事もない。

そしてこの偶然、あらゆる事が均衡になる一点に生れ合わせた自分の誕生の日は、幼い時死別した父の気持に繋がる唯一の事であったと思ひ出されてくる。

季世が生れた時、母は父に勧めたのだと云う。

「女の子は年は一つでも若い方がいいから、出生届けは来年にしましょ。何もこの慌しい年の暮れにしないで、早生れのおめでたい正月生れにしましょ」

しかし父は母の願いをどうしても聞き入れなかったと云う。

「何事でも親の勝手な判断で子供が持つて生れて来たものを歪めてはいけない。親が子供に一生付いて守つてやれるわけではないし、子供に備わっていたものはすべて親が手を加えたりせずそのまんま」

頑として母の意見を退けながら、しかし老いていた父はこらえ性がなく、すぐ本音を洩してしまふのだったと云う。

「わしはこの子が幾つになる迄、元気でいられるかわからないのに。一日でも長く側にいてやりたいのに来年生れにしたら、一歳も幼くなってしまう」

当時年齢は数え年だったが、季世が生れた時、父はもう六十歳を過ぎていた。

郷里で開業して長い年月が経っていたが、医者としての活動期は盛りを過ぎていて、古くから交際のある知人だけを診ながら、多くの時間を趣味に費やす、のどかな生活だった。

父が変えなかった自分の正確な誕生の日からの生存線は、季世にはあらゆる事が偶然、均衡になる静かさを湛えた位置であると同時に、一方、不可抗力的な偶然の力でこの位置はあつと云う間に崩れ、自分は日常時間の暗闇の中に放り出される予感がしてならない。

誕生日の数字が前後左右また、あらゆる方向から辿っても同等の数の人は無数にいるであろう。

しかし季世には自分の誕生の日から三十九年間の生存線だけが他人とは異なり、自分自身の内面の崩壊に向う一年一年に思われてくる時がある。

館町駅行きのバスは空いていた。

車窓を流れる町並みは通った事も名を聞いた事もない土地である。

大通りを進むと交叉点があり右折すると今までの路上の騒音が嘘のように退いた緩い坂の住宅地になった。

昼前の坂道は人通りは稀であり、風が輪になって吹き抜けて行く。

ふと季世は自分は今、照川極という見知らぬ男の内面に向って進んでいる気がしてならなかった。

——もっと早く死ぬべきであった。そう書き残してあったと記事に出ていた。
自分の内部でも常に同じ声が反響しているのを季世は知っている。

だが結局、死ななければどうなって行くのかを見るために、死ななかったために開けて行く一ヵ月、一年を見つめるためにぶらぶらと生きて来たと思う。開ける周囲は昨年と同じ景色でありそのまた翌年も同じ景色だった。

バスが進んでいるゆるい坂道は長く、両側には手入れの行き届いた家々が並び始めた。しかし木々が若く、流れた歳月の浅さからどの家々も箱庭のように心もとない。

今、季世が住んでいる、海鳴りが去来し大地に根を深く沈めながら聳える、地上十数階の頑丈な高層ビル地区に比べると、庭も木も家も持ち上げれば根こそぎ抜けて来そうである。

だがバスが坂を登り終えると、急に木々の茂みは鬱蒼とし、驚く程重厚な感じの家々が、すぐ側を通過する電車の轟音を撥ねのけながら堂々と建っていた。

通行人の多くが急ぎ足で一方の方向へ向う姿が車窓から見えた頃、ようやく館町駅が現われた。

上下線共、電車が発着した直後なのか、駅員の一人が所在なさそうに出札の柵の中に立っている。

「——電車に乗るんじゃないんですよ。一昨日の自殺のあった場所を見に来たんですよ」

季世がバスを降りて近づくと、駅員の方から話しかけてきた。

「昨日からあなたで五人目。仏さんとは知り合いなんですか」

「ずっと昔のね」

季世は反射的に答えた。

「他の四人は皆、近所に住む野次馬だったんですよ。新聞に出たので見物にやって来たらしい。あすこをですね」

駅員は背伸びをしながら路上を指差した。

線路に沿ったその道を真直ぐ歩くと、学校の石塀に突き当たり、道は塀に阻まれてしまいが、線路沿いの空地はどこ迄も続いていると云う。

「仏さんは布団を冠って線路に入ったんですよ。運転士の話ですとね、天気の良い日は小学校の塀によく当直員の布団が干してあるから、それが風で空地に落ちていると思って、気にも留めなかったんだそうです。ところが電車が近づいたら布団が急に動き出してそのまま線路に蹲ってしまい、急ブレーキを掛けてもとても間に合わなかったのだそうです」

季世は礼を云って教えられた線路に向った。

館町駅から線路沿いの町も重厚な家並みが広がっていた。

記事に出ていた町名番地と同じ標識が立つのを認めた時、季世は周囲を見渡した。

照川極を通して初めて知った町だけに、到着してみても彼の不在が強く感じられ、町は自分と繋がる部分が抜け、空疎な構えに見えてくる。

石塀に向って歩いているうちに側の線路を何度も電車が通過して行った。

自転車のベルの音と共に事故現場へ向う子供達が追い越して行く。

季世は子供達が見る事に飽きて立ち去るのを待ちながら、道の途中で足を止めた。

線路の向う側の石垣に黒枠で囲った照川家の不幸を記した案内の貼り紙が出ていた。